

嚴
祕

思想戰戰鬪綱要

【以印刷代謄寫】

昭和五十二年二月十一・十二・十三日の三泊三日間
在京の若手国文研究会員諸君が、止谷の
青少年研修会館にて合宿されるに際し、急ぎ
ニシテ資料を水沢弘子と作成参加者に配布す。小島村

目次

日本青年行動綱領……………一

序……………五

思想戰戰闘綱要……………八

第一章 運動の性格……………八

第二章 指導者としての訓練……………三

第一項 一般的心得……………一三

第二項 研究……………二〇

第三項 活動……………三三

第三章 運動.....二六

第一項 概括的注意.....二六

第二項 組織.....二九

第三項 宣傳.....三〇

第四項 學生運動.....三三

第五項 國民運動.....四〇

第四章 意志實現の方法段階.....四四

第一項 政治とは何か.....四四

第二項 方法及段階.....四七

跋.....五五



日本青年行動綱領

第一 永遠ノ宇宙變易ノ人生ニ最高價值ヲ照示スル日本國體ノ確信ヲ我等ノ生

ニ客證セシメヨ、生ケル精神ノ内奥ニ於ケル最高價值ノ信證ノミ無窮國體防護戰ノ力源ナリ、國體ノ無窮ナル限リ我等ノ戰ハ始終ナシ、戦死コソハ生ノ極致、同信協力ハ、戦死ヲ悠久ニ確保スルノ途ナリ

第二 我等ハ祖國守護神靈ヲ祀リ、戦死者ノ靈ヲ祭ル、我等ハ古人ト共ニ七生報國ヲ誓ヒ、靈魂ノ永遠ニ現實日本國土ニ留メラレムコトヲ祈願ス、ソハ三世ヲ分タザル祖國生命ヲ防護セム爲ナリ

第三 歴代詔勅御製ヲ拜誦シ、しきしまのみちヲ實修ス、ソハ新シキ國民宗教儀禮ニシテ、マタ國民藝術ノ大道ナリ、責務果遂ノ爲ノ不斷ノ苦闘ハ日本固有ノ道德ものゝふのみちヲ復興セム、我等ハカクシテ生ノ全意義ヲ認識ス

第四 最高價值ハ人類精神ノ交流世界ニ於イテ證セラルベシ、故ニコ、ニ世界皇化ノ經綸アリ、世界的動亂ハンノ契機ニシテ祖國防護戰ハンノ方途ナルヲ明ラカニスルニ於イテ政治ノ真意義ヲ示サルベカラズ

第五 支那事變ノ急速根本的解決ハ聖勅ノ嚴命シ給ヒ世界情勢ノ要請スルトコロニシテ、斷ジテ曠日彌久ヲ許サズ、我等ハ之ヲ妨グル内外一切ノ障害ニ對シテ同志ヲ糾合シ死闘セムコトヲ宣言ス

第六 明治以來國家國民生活ノ萬般ニ關シ、正シキ指導育成能力ヲ缺ケル現代教育ノ根源的改革ヲ期ス、教育改革ノ樞軸ハ學術改革ニシテ、殊ニ帝國大學々風ノ徹底の刷新積極的建設ノ爲、我等ハ全學術能力ヲ傾ケ激戰精

第七 家庭、學校、軍隊、職業ヲ一貫連結シ、新聞、雜誌、劇、映畫ソノ他ノ

公共文化機關ノ活動ヲ羽翼トスル教育國家體制ノ生成ヲ期ス

第八 我等ハ日本國體ニ反逆シ人類ノ死敵タルマルキシズムノ徹底の剿滅ヲ期

ス、一連ノ素質のマルキシズムニ對シテモ些カモ假借スルモノニ非ズ

第九 所謂現狀維持對革新ノ概念的區劃抗爭ヲ一刀兩斷シ、共通スル無原理ト

精神の弱力トヲ照破令活シテ、全國民協力ノ唯一道ニ邁進セムトス

第十 現下經濟論ノ紛糾ハ畢竟國體觀念ノ不明微ニ淵源ス、我等ハ所謂資本主

義、社會主義或ハ皇道經濟等ノ名義ヲ以テスル凡ユル恣意ノ空論ヲ斥ケ、

古今ノ史實ニ鑑ミ、現前ノ情態ニ即シ、中正ナル認識ヲ定立シテ、國論

ノ趨向施策ノ進路ヲ批判決定セムトス、我等ハ新奇ノ理論ニ依ラズ、「忠

實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ」以テ國運發展ニ資

セシムベキ平坦易簡ノ道ニ立タムノミ

第十一 現代日本國民生活ニ憂憤ヲ禁ゼザルモノノ悲痛ナル共感ノ上ニ、本行動

綱領ハ掲ゲラル、再ビ同信協力ノ重大意義ハ絶叫セラレザルベカラズ、

我等ハ斷ジテ私意ヲ以テ黨同スルモノニ非ズ、然レドモ反國體思想意志

トノ決闘ニ於イテ初メテ我等ノ信ハ客視化セラル、思想戰ノ勝利ハ言葉

ノ勝利ナリ、我等ノ戰ガ日本語ノ勝利タラムヤウ努力セシメヨ、我等ノ

戰ガ日本歴史ノ勝利タラムヤウ死闘セシメヨ、神靈ノ加護ハ我等ノ上ニ

在リ

序

昭和十三年六月東大精神科學研究會が學内に起つて全國的學生運動の契機が與へられ、同年十月、雜誌「學生生活」が發行され、十一月小田村寅二郎兄無期停學となつて、いよ／＼同志學生の騒起が促され、その年暮、第一回の全國巡遊が行はれてから既に滿三年の時間が経過した。十四年七月の相州當麻村に於ける第一回全國合同合宿、十五年五月日本學生協會設立、同六月共立講堂第一回大講演會、七月信州青平合同合宿、十二月精神科學研究所設立、新潟、水戸、佐賀等の諸事件その他の無數の段階を経て、今や、學生運動は文字通り全國的運動の形態と實力とを備へるに至つた。しかし、こゝまで來るのに、三ヶ年の時日を要したこと、更に、我等の思想運動の當初から見ると、十四年の長年月を費したことをおもふと、現状は到底満足し得べきものではない。刻々に迫るものは國家の危急である。我等は責務の重大なるを知り、我等のいま進みつゝある途以外に、國家の窮迫を打開する方

途の一つだになきことを知つてをる。而も、我等の運動の現在の進展状況は切迫する國家の危急に對して應じ得ると思へぬのである。我等の焦慮は今や從來の如何なる時機よりも大である。友等よ、新しい戰鬥方式を考へよう。能率を最高度に發揮しよう。我等は青年であるけれども、經驗は決して寡少ではない。むしろ、それが累積されずに流されて居る。無数の經驗を整理しよう。さうして、それを新しい友等の手引とし激勵としよう。さうして、運動の前進行程を激化しよう。我等の生の實現を急がう。

目標を確立しよう。日程を定めよう。激情から發した單なる思想運動といふのみではなく、冷靜な理性の計畫に従つて、計畫の確實な實現を圖つて行かう。思想改革の効果を確保し、加乘する政治運動に全員邁進しよう。何年何月にはどれだけのことが行はれてをらねばならぬと言ふことが、全員に明瞭になつて、はじめて戦線を統一することが出来る。こゝに思想戰闘綱要を編纂しようとするのである。

完成される迄に幾度か書き直される必要があらう。否、おそらく完成されること

はあるまい。まづこゝに一つの試みを呈示しよう。運動の將來をおもふ人々は之に對して積極的意見を送るべきである。かうして思想戰戰綱要が全員の苛烈なる戦ひの體驗を益々豊富に織込んで、凡べての志ある人々を鼓舞し、指導し、全國に全世界に分れ戦ひつゝある同信の友らの心を常に大きく一つに呼吸せしめる、高き内容を把持するやうになるべきを期待する。

最早昨日の單なる學生運動思想運動ではない。我等は國家の全局に對して關心をばらひ、否、責任を感じる運動の性格を帯びて來てゐる。發展すべきところに發展して來たのである。單なる學生運動は言ふ迄もなくセクシヨナリズムである。單なる思想運動も亦そのみでは遂に個人的解脱の追及の範圍を出でない。聖徳太子の文化創業が政治そのものであつたこと、山鹿素行實學の理想が治國平天下にあつたことは今更言ふ迄もないのである。我等はいまこそ、確實な道を勇猛進撃しよう。

昭和十六年十月

田 所 廣 泰

思想戰闘綱要

第一章 運動の性格

第一 日本國體を護るといふことは如何に悲しきことであるか。死を以てする以外に防護の道はない。八紘一宇、皇道宣布を口にする何ぞ輕々しき。彼等は悉く國體の信缺落の徒のみ。聖德太子、和氣清麻呂、護良親王、楠正成、吉田松陰、忠臣の生涯は凡べて悲劇であつた。思想學術改革の大文化運動として勤王舉兵が行はれたことは、史上我等の例を以て嚆矢とする。すべて 歴代天皇、ことに 明治天皇の鴻恩による。現代に於ける根本的意味の勤王舉兵！ 忘るゝなかれこの一語を。

第二 明治維新は成つたが、孝明天皇の叡慮は決して實現されたとは言へない。明治四十五年間、それは一つに 明治天皇の大御心によつて導かれつゝ、國民は大御心に沿ひ奉つたと言ふことは出来ぬ。梅關時代から次第に累積して、日本國民を迷妄の深淵に投じた民政意志は、殆ど九百年の後除かれたとは、斷じて言へ

ぬのである。楠公の孤忠、維新志士の悲願は今日の現つに殘された祈念である。我等の胸に、我等の血に。これを悲しき事實と思はぬのであるか。大正、昭和、それは再び日本國民の死敵民政意志の跋扈を我等の眼前に示しつゝある。形式のみ天皇親政。而して、天皇機關説、マルキシズム！その實行は學説の流布に従つて、國民の魔睡の中に一步々實現されつゝある。凡ゆる欺瞞は之より生じた。あゝ、國民が目覺めた時國民は何を發見するであらう。抑々また永久に目覺めざるか。神國日本國民たる威嚴を奪はれつゝ肉體のみ生きむとするか。我等は祈り且つ戦はねばならぬ。楠公たらむことを、鮮明な、現實感覺に於いて祈念せよ。世界動亂のたゞ中に國體を防護せずしては、日本は遂に亡國たることを自覺して、不斷に戦死を覺悟せねばならぬ。而して、國內に國外に全世界に、全人類の五感に大稜威の感覺せらるゝ時の爲に戦ふ我等に、戦死のみが許されたる最高の榮譽なることが呼び交はされ、誓ひ合はされねばならぬ。

第三 我等の戦は無窮國體防護戦である。

明治天皇御製

をりにふれて

民のため心のやすむ時ぞなき身は九重の内にありても

をりにふれて

思はざることのおこりて世の中は心のやすむ時なかりけり

と歌はせ給へるを仰ぎまつる。緊張と弛緩を越えて、大痛感大情熱を内に藏する綜合的意志を把持せねばならぬ。それは不斷の憶念でもある。それは分析に堪へぬ全一的感情意志である。よゝ、生きとし生けるものゝおもひを統べ給ふ。スメラミコトの大御心、それは永遠。宇宙に終始なき大悲心にまします。大御心に應へ奉り、日本國民の生くるおもひの永遠の負荷にたへむとする者。友よ、友等よ。何たる重大任務。力のかぎり、とは身うち力の盡き果つる迄との謂である。我等はかく戦はねばならぬ。

第四 古事記に表現せられたる宇宙の如き無量の意志！ 現人神大君の下、いまでも第二建國神話創造時！ 來るべき時代には、國民各自の精神的態度が嚴密に問題

とされねばならぬ。我等の内心に把持するところは、民族性格確立の基礎となるであらう。刻々に新しき禮儀が我等の間に定型しつゝある。自然に而も意志的に之を助長完成せしめねばならぬ。深く内心に湛へ、大膽に之を表記し實現す才ことが、我等の日常の傾向となるべきである。眼差と動作とは精神の表徴であることを、而して性格は戰を通してのみ鍛へらるゝものなることを忘れざるべきである。

第二章 指導者としての訓練

第一項 一般的心得

第五 我等の運動は國家の運命をその限られたる生涯に質感する者の運動である。生くることを大君の醜の御櫛と戦ひ死ぬことに歸結せしめむと常に悲願する者の運動である。歴代詔勅御製集を拜誦しまつり、大御心をうつゝに仰ぎ奉りつゝ、生きながら靈戰に参加する者の運動である。

第六 同信の士は國家全體の動向に對して不斷の注意を怠らざるべきである。今日既にその判與へられたる職責のみの果遂といふが如きことの何ものをも意味せぬことを辨ふべきである。國家のことを己が身のこととして考ふるものなきに至つて、今日のこの無意味なる時代が來た。身の起き臥しは國家と共にあるべきである。常に定見を確立せよ。問題に對しては、必ず自己の見地より疑問を追及せよ。信念を以て主張せよ。すべて曖昧に附するなかれ。

第七 我等の運動は指導者の運動である。といふことは、責任を以て任務を遂行するものゝ運動であるの謂である。命令・依託を受けたる者は、その事項に關して、單なる職責果遂を以て甘ずる心理を嚴に排除せねばならぬ。先づ他の何人もその問題を眞劍に考ふるものなきことを自覺せよ。自ら下命者の地位に於いて全局的に思慮し、その及ばざる範圍まで熟考し、創意を以て企劃し、之を遂行して後は自己の意見を添へて正確に報告せよ。命令・依託者は、もし右の趣旨を完うせざる復命ありたるときは、懇ろに教へ且つ嚴しく戒めねばならぬ。又、二重命令依託者は、第一次受命受託者に、右の如く指導したりしか否かについて嚴密に訊さねばならぬ。

第八 指導者は濃かなる友情を持たねばならぬ。權力と叱責とを以てせねば部下を動かす能はざる如きは、指導者の資格を有せざる者である。部下に對して被指導者に對して、自覺せざる中に指導能力を得、性格を鍛へ、綜合的人格たるを得しむるやう善巧方便する者こそ最上の指導者である。「愛語よく回天の力あり」と道元は教へた。

第九 指導者は常に暴風雨をついて突進し、彈丸雨飛の中を先頭きつて突喊し、最も強力なる敵とも獨力を以て戦ひつゝ常に鮮明に英雄の姿を現出せねばならぬ。然らざれば、如何なる同志結合の技巧も忽ちにして土崩瓦解するであらう。他より依頼せられざる限り多數を集結して事を成すことは出来ない。

第十 人生には必ず幾度か轉變の契機があり、指導者は正しく之に處して、こゝに全人生統御の妙機を把握し、開展の依據を確保せねばならぬ。論語の「大節に臨んで奪ふべからず」といふが之である。併しながら、今日は大節は彼方より來らず、思想が招致する。指導者は自ら危機を作り、之を支配し、活用せねばならぬ。それは彼を指導者たらしめると共に、彼がそれによつて國家に盡す具である。危機は彼自身のものである。

第十一 自己の周囲の人々に對して、少くとも自分がその場に在る間、必ず全體的統一的の崇高なる緊張感を懐かしむるごとく行動せよ。殊に己が全感情の激越なる表白を以てこの目的を達成せよ。己が其處を去つた後に、そこに残れる人々に、己

の上を僥ばしめ、己が言葉を語り合はしめ、己が死守する精神に彼等を集中せしむる如き靈威磅礴せる決然たる態度を以て行動せよ。

第十二 何よりも人に消えがたき印象を與ふるやう強烈崇高なる精神を把持せよ。併しながら、自然に全意志のあふるゝ如き技巧はまた戦士の修養でもある。

第十三 沈黙は不可である。如何なる場合にも必ず堂々と主張せよ。一部にのみせず、萬人にせよ。問題を曖昧にせず、鮮明にせよ。

第十四 其の言葉の如何なる斷片と雖も壞れたる食器のごとく捨てられぬやうにせよ。無意味な言葉程容易に人から輕蔑せらるゝ原因を作るものはない。常に主動的立場に自己を發見せよ。

第十五 他人に會ふときは必ず之を説得せよ。説得し盡さざるとも、敵視の中に相分るゝなかれ。敵とは精神的劣弱者である。彼はよく記憶して之と最後迄戦はねばならぬ。併しながら、戦は精神の戦である。敵視することは精神的優位の抛棄なることを自覺せよ。驕慢なるものを徹底的に挫くべきである。しかし、弱者は憐まね

ばならぬ。

第十六 不斷の策勵が行はれねばならぬ。協同生活にあつては、自ら督勵するのみでは充分でない。戦は苦戦の連続であらう。全身の疲勞から、精神の極度の弛緩が來ないと誰が保障し得よう。之を責むるのみでよいだらうか。否、かゝる時こそは心の底からの慰安と同時に激勵を與へねばならぬ。友は再生のよろこびに立ち上るであらう。再生、復活、何たる欣びであらうか。かくして常に策勵が行はれねばならぬ。しかし、それは飽までも機械的連續を以てはなく、生命の脈動を以て行はるべきである。全協力體の生ける呼吸の中に、おのづからに各員が疲勞と弛緩から交々起ち上るやうに誘導するのが指導者の任務でなくして何であらう。それは、戦によつて鍛へられた豊かなる性格によつてのみ可能である。

第十七 部下にして全體的に創意を以て思慮し行動し得ざる時は、如何なる理由ありとも指導者の責任なることをおもへ。感ふことの凡べてを語つて、部下を指導せよ。局部的思想は容易に看破されるであらう。放置してはならぬ。

第十八 同輩の間は殊に重要である。溢るゝ友情を以て、研鑽せよ。捨身精進する者の間には卑しむべき狎合はない。崇高なる親和の雰圍氣は殊に命令服従の關係なき同輩の間の決死的協力から生れる。この雰圍氣こそは活潑にして若々しき創造力の源泉である。友の眼を見よ。友の後姿に目を注げ。一人をる時は友等を、集れる時はそこに在らざる友を思へ。権力、實力によらず、眞の人生の創造力を以て邁進し、寧ろ創造力そのものたらむとする我等の運動に於いては、この同朋親和の重要性を強調せねばならぬ。勿論先輩、後輩の間にも、この精神は常に保持せられねばならぬ。

第十九 先輩に對しては温情に依頼してはならぬ。先輩の意志を實現すべく、自ら代つて意志すべきである。尊敬を失はず、併しながら、顧慮するところなく肉迫せよ。かくして、はじめて先輩の眞情に觸れることが出来る。

第二十 後輩を愛し過ぎてはならぬ。必ず墮落する。いよゝ卓然たる者となるやうにひそかに、心の中で熱禱せよ。

第二十一 敵、味方、共に正確に之を評價せねばならぬ。思想家、精神主義者に多い純情と感激性とは多く過當評價を誘致せしめがちである。部分的長所を以て輕々しく全體を高く判定するが如きは指導者としての資格なきものである。多くの過當又は過少評價は、自己の利害關係に隨伴する肯定的又は否定的願望と結合するものであることをおもへ。冷徹の判斷は、求むるところなき精神の威力に基いてをることを常に自ら教ふべきである。

第二十二 確信のあまり敵を輕視し、味方を高く評價することは極めて有り勝ちのことである。確信はあつても、之を實現する技術に於いては必ずしも備はらぬ場合が多い。否、往々敵のために致されることがある。運動に携るものは技術を輕じてはならぬ。

第二十三 金錢のことを以て部分的問題として輕視することは許されぬ。物質を規律し整理して其れに生命あらしむることが精神の力である。

第二十四 解決を要する問題は即刻その場に於いて着手せよ。逡巡せず遂行せよ。

後刻適當の時に處理せむとすれば、九九パーセントまで適當の時は逸し去らるゝことを思へ。面會が適當であるとしても、それを遷延せしむるより即刻一本の電話を以て連絡する方が効果的である。堂々たる論文に手間どるよりも、熱烈なる一片の手紙を以て訴へる方が人の心を動かすに足りる。時局に關する纏つた論文を讀む機会なき場合には、新聞電報の斷片が自分の心を生き／＼と時局に結合する。「爲さざると遲疑するとは指揮官の最も戒むべき所とす」と各兵操典綱領に記されてゐるところは、思想戰に於いてもまた適用せられる。遲延と躊躇とはすべて確信の缺落を證明する以外の何ものでもない。時間の正確は信念の象徴である。如何なる場合にも内心の弛緩と齟齬が看破せられぬやうにせよ。

第二十五 現状に對する不滿が改革意志の前提である。意志とは生命の本源を守りつゝ前進の行路を打開せむとする生の威力である。現實は常に缺陷に満ちてをる。前進の路は常に困難を極めてをる。停滯は死滅である。勇氣なき者は永遠の荒廢に身を任せよう。死地に身を曝せ。友等よ。

第二十六 大御稜威の無邊なることを正しく信知する者にとつて、國體防護戰の無敵の信を増上する。無敵とは熾烈なる大積極戰に於ける優位の確約である。一刻たりとも戰を緩和することを意味しない。事態の外面的改善に満足して戰鬪の氣魄を喪失する者は、あまりに卑小なる性格と言はねばならぬ。ナチ運動も、狂信的黨員の活動によつて成つたと言はれて居る。熱狂と執拗とがないかぎり我等の目的は斷じて成功しない。

第二十七 歴代天皇の履ませ給ひし敷島の道を我等も亦履まむとする。歡喜も悲哀も苦悶もともに全一的國家國民生活の永久生命に溶融せしむる無窮の道である。

第二項 研究

第二十八 研究は行動を意志して行ふ場合のみ、その目標を見失はずに遂行し得る。無意味に積みためた教養、ことに讀書が、そのまま直ちに精神の墮落を意味することを思へば、慄然とせぬであらうか。精神を常に高く掲げねばならぬ。

第二十九 研究と行動との意識的併行といふことが、我等の新しき方法である。否、

兩者の分離が時代の墮落の原因であつた。山鹿素行は、「上古は君長之を教へ之を導く、後世は然らずして別に師を立つ、既に衰世の政なり」と言つた。然し、この兩者の併行は安易な精神によつては斷じて行ふことが出来ない。併しながら今日、かゝる力あるものなき時、もし之を眞に實現し得たならば、兩者の併行は正しく無敵と同義語である。如何に苦しくとも、之を實行せねばならぬ。

第三十 研究は運動遂行のために必要であるから、之を深めねばならぬと考へ、自己の研究の不足を痛歎するとき、それは意志力の沮喪に媒介されて容易に自己修養的研究に墮落し、やがて永久に小さき自己の關心に閉ぢこもり勝ちである。これは屢々襲ひ來る危険なる誘惑である。自己の責任も、全體との關聯に於いて考へず、抽出して思慮すると、勇猛心を喪失し、研究それ自體がつまらぬものに終つてしまふ。反對に運動のみに走るといふ危険も往々あらうが、指導者たる素質あるものへの危険はむしろ研究への執着である。

第三十一 我等は一人々々自己の選擇した研究を任意に行ふものではない。組織的

研究體を作りつゝあるのである。それを完成しようとするのである。ローゼンベルグのロシア研究機關の如きは、數十名の研究員が科學的組織を以て、包括的に正確なロシア研究を行つてゐる。如何なる問題も、ロシアに關する限り、正確な答が出るといふのである。しかし、國家の綜合的問題についての組織的研究はどこにも未だ存在しない。それは科學的に組織された通信協力體によつてのみ實現されるからである。將來の國家はこれなくしては興らない。

第三十二 研究を役立てよ。教養としてではなく、國體防護戰の最強の武器として鍛へよ。各自の研究を次々に纏めるやうにせよ。全體との關係が確立せぬ限り纏めることは不可能なることを意識せよ。

第三十三 先輩の研究の成果を尊重するに過ぎて、それを公理化し、それには検討を加へず自分等はそれから出發しようとするところがあり勝ちのことと言へる。しかし、それは、先輩の苦心の研究を一つのヒポテーゼとすることで、自然科學と違ひ、精神科學では百害あつて一利ない。同志の間の研究でも、基礎的問題を氣分的な

合言葉で済ますことなく、一應根本問題を論究してから、議論を展開するやうにせねばならぬ。

第三十四 特殊の用語を常用して、それで自分はわかたつつもりで居る程愚かしく害あることはない。普通の言葉を使へるだけ使ふやうにせねばならぬ。それは、他人に理解されるといふだけの意味ではなく、自分の思想に普遍性を保たせる上に必要である。

第三項 活 動

第三十五 例へば一つの講演會を催し、合宿を行はむとする場合、まづ責任者は獨自の見解を以て、之を舉行する必要性の程度と現在の情態との關係を明らかにし、如何なる方法により、如何なる範圍の効果を收めむとするかを算定し、如何なる意義を有するかを關係者に明示せねばならぬ。關係者が、明瞭なる意識の下に目標に協力すべき爲である。明示に先つてこれらについて他の意見を求める爲會議すると、責任者は斷じて會議に依頼してはならぬ。會議に於いては自己の責任を帯びた

る問題について飽まで明確なる討議の急速に行はるゝ如く推進し、自ら之を纏め結論に導くべきである。

第三十六 一つのことを行つた後には、必ずその成果を検討し、豫定との相違を調査し、又、豫定そのものが如何なる缺點を持つて居たかを再考して、將來に備ふべきである。

第三十七 同一のことを再び行はぬやうにせよ。合宿も去年と今年とは違はねばならぬ。同じことを再び講義するのは止めねばならぬ。必ず進歩があり、展開があることを萬人認めうるやうに事を行へ。それは、他人を飽かしめざると共に、自らの心に沈滞を味はざらむが爲である。

第三十八 急速に展開する運動の途中では、やりかけの仕事も中間に於いて廢される虞がある。しかし、飽まで遂行せねばならぬ。遂行せねば、その結果によつて問題自體の價值を判定することが出來ず、將來の参考にもならぬからである。第一意志の恥辱である。

第三十九 協力が責任の所在を曖昧ならしめぬやうにせよ。雑然たる協力が仕事を妨害するのはまだ許せる。人間が弱くなることは断じて許すことが出来ない。

第四十 連絡に心せよ。五分の暇あれば葉書を書け、十分の暇あれば手紙を書け、一時間の餘裕あれば親しく會つて説得せよ。

第三章 運 動

第一項 概括的注意

第四十一 思想精神の運動は、全國民の内心を揺り動かす運動である。國家生命の根本に關する運動である。それは、眼前の變轉に捉はれざるべき恒久的究極的運動形態であり運動内容である。併しながら、直面する國家國際情勢の激動の中にこの効果を確保する爲には、政治的實行力を以てせねばならぬ。畢竟政治は効果の問題であり、方法の問題である。併しながら、人間世界が矛盾多く障害に富んでをることとを思へば、方法が重視せられ、効果が注目されねばならぬ。その方法は根本を誤らざる限り、衆目を奪ふ鮮明なる効果を企圖しうるやうに選擇さるべきである。

第四十二 一切の問題が結局國家に結びつけらるゝものである限り、一切は究極政治的實現を得なければ完きをかち得ない。殊に最も根本的なる思想精神の痛切なる要求に於いて然りである。かくしく我等の運動は最も本質的政治運動であることを

開明せねばならぬ。

第四十三 戦はすべて敵の識別より出發する。國體防護戰に敵の在處を明らかにせねばならぬ。究極の敵はその人にあるにあらず、その内心に侵入した思想にあること勿論である。併しながらそれは毫も戰の緩和を正當化することにはならぬ。却て至誠兆人を感じしむるは、強敵との激闘、その殲滅過程に現成する道である。

敵の發見確認は、また同志結合地盤の選擇と密接に關聯する。我等の戰が畢竟政治的力を以て遂行せらるべきである限り、戰線の整備に注意が向けられねばならぬ。現代日本に於いて如何なる集團又は階層が、それ／＼如何なる問題に於いて我等の同志であり又敵であるかを常に知悉することが必要である。而して、之等を我等の意圖する目標に、離合せしめつゝ、夫々の遭遇する契機に於いて、全體的關聯に目覺めしむるやう導くべきである。これが運動の過程に於ける國民教育の方法である。

第四十四 併しながら、同志の結成は一つの危機である。人間の集合が腐す歡喜の

爆發が、内心に弛緩の原因を導入することなく、反對に孤獨の悲痛を對照的に深刻化せしむる契機たるごとく意志せよ。内に永遠の孤孿を味ふものにしてはじめて全國民の情意を包攝し、大情熱の把持者として、祖國無窮の生命に通ふことが出来る。全國民運動として陥りやすき弱力化を運動展開の第一日に戒めるものは、眞の指導者である。

第四十五 我等の運動は破壊の運動にあらず、建設の運動であることを常に闡明すべきである。一人にして數人の働きをなすべく用意せねばならぬ。ことに協力の方法について細目まで研究し、合成威力の最大限の發現に關して明らかにしておかねばならぬ。

第四十六 大衆を煽動し、衆力を以て事を爲さむとするは畢竟弱者を利用する卑劣行爲なることを明らかにすべきである。彼等デマゴグは、弱者とは遂に部分的に、従つて利害打算的のみにのみ、ものを考ふるに過ぎざることを知りながら又従つて、事成りたる曉、大衆は遂に一個の道具として弊履の如く捨てらるゝものなることを

知悉しつゝ、敢へて之を利用するものである。彼等の面皮を剥がねばならぬ。而して我等の運動が、如何に彼等と異なるものであるかを、自他共に明確にせねばならぬ。

第四十七 我等は常に少数である。我等は國家の行政權力によらざれば忠義を盡し得ざる機構制度至上主義者を輕蔑する。我等は目的貫遂の爲に終局まで常にあまりにも同志の少数なることを歎息せざるを得ぬであらう。それ故に、我等は鍛へねばならぬ。我等の道徳は簡易なる生活によつて確保されよう。我等は日常生活の最小の障害によつて最大の能力を發揮せねばならぬ。企畫力を養成すべきである。先輩に依頼せず、先輩が路を切開いた以上の苦心を以てしてはじめて目的を達成しうることを常に念頭におくべきである。

第二項 組 織

第四十八 組織とは意志連絡の機能であり、統一的生命の蓄積地であり、指導者の鍛錬道場である。意志なき者には組織は空に過ぎないが、生命と意志との充實した者にとつては益々組織の必要性が痛感される。我等の同志にあつては、かゝる熾烈

の要求なきかぎり組織は許されぬ。しかし、かゝる欲求なき者はやがてその一時的な意志をも確保する力を失つてしまふであらう。

第四十九 先づ同信の共鳴者がをる。次に細胞が出来る。この二つが組織に發展して行く。細胞が大切である。それは原始的組織である。

第五十 單に一人の同志を作るといふことは意味をなさない。その同志が少くとも他の一人の同志を作りうるやうな同志を作らねばならぬ。

第五十一 組織は活動の爲の組織である。組織は動くべきである。外界に對して影響力を示すべきである。そこで、研究が行はれ、訓練が施され、宣傳と戰が行はれる。生命そのものゝ如く組織體は成長する。

第三項 宣 傳

第五十二 意志の宣言と分散せる要求の吸引。不安と憧憬の心理學。殊に群集心理學！如何なる人と雖も不安と憧憬とを持つて居るが、満ち足りたる反面に幾ら呼びかけても宣傳は最初より無効である。併し如何なる人と雖も不安と憧憬の面に於

いては愚衆の一人である。それは容易に支配される。

第五十三 變化と一貫性とを鮮明にせよ。例へば、必ず同一の標識、マークを用ひつゝ、新鮮なる變轉を示すこと。變化は注意を惹く爲に、一貫性は威力を感じせしむる爲に。

第五十四 兎に角反覆が最も重要である。「彼等は不屈の意志を持つてゐる」と感ぜしめることは、運動の宣傳にとつては最も効果ある點である。「悪評も無視よりは遙かによい」とヒットラーは言つた。名前を知られることが大切である。激越な主張と結合した名前を。

第五十五 演説と文章と、兩方か、或は何れか一つを修得せねばならぬ。演説はことに必要である。聴衆の心は如何やうにも捉へることが出来よう。集つて來たといふことは、既に何ものかを求めてゐるといふことである。求めて居るものは求めるといふことによつて弱者である。批判しようとして來てをる者も、その意味で求めて居るものである。不安を滅して居るものである。これを支配出來ぬ理があらうか。

第五十六 「燃え立つ情熱の暴風が、雷鳴の如き言葉となつて迸出してこそ、はじめて民衆の胸に喰ひ入ることが出来る。この情熱が與へられなかつた者や、その口が封じられた者は、豫言者として天から選ばれることはあり得ない」マイン・カム
ブより。

第五十七 一文を草するときには必ず先づその讀者の心理を洞察せよ。手紙ならば相手を。論文ならば披見者を。後者は殊に一人ではなく、また一種類ではないことを記憶すべきである。我等は斷じて讀者の興味のために執筆するものではない。唾棄せよ、かゝる卑劣なる目的を。我等の目的は讀者の全心を捉へ、その内心に我が欲する感情の猛炎を燃え立たしめ、その意志を決定し、我が欲する行動に勇敢に立ち向はしめるに在る。それは眞に綜合的精神の威嚴ある命法でなければならぬ。

讀者は自分の作り出すものではない。常に國家生活の凡ゆる條件を孕んで、與へられたるものである。讀者の心に通ぜざるは客觀的内容の缺如を意味する。それはまた筆者の意志の虚弱以外を意味しない。周匝にして勇敢なるものゝみ、知られざる

讀者の間に新しき意志の道をきり開き得る。

第五十八 平明なる言葉は實は生命の表現に堪へうる唯一のものである。晦澁を避くべきである。ヒツトラーの演説は、非通俗的内容を通俗の用語の中に盛ると言はれてゐる。平易なる用語は國民の、民族の言葉である。平易なる言葉を以て自由に調高く表はし得るといふことによつて、思想内容の客觀化の證據と判定せよ。客觀化とは、共なる道の發見を意味する。それは生の原理の發見である。大乘といひ、一乘といふ、それは一方では深刻なる哲理の民衆化であつたと同時に他の一方では究極原理の定立でもあつたことを思へ。かくして、思想運動は眞の意味に於いて國民運動でなければならぬ。我等は未曾有の國民的思想運動を遂行するものである。

第五十九 從來の或はビラを撒布し、或は出版物に執筆し、集つた者に正面より説話し、さて共鳴したものを同志にするのみの素朴な方法は、急速に新方法によつて複雑化せられねばならぬ。新しく採用せらるべき一方法は、有能と見込んだ者に對する執拗なる誘引である。有能なるものは何等かの確固たる據り所を持つものであ

る。先づ何氣なく彼に接近せよ。明敏なる觀察を以て、彼の望むところ、厭ふところ、怖るゝところ、據り所とするところを迅速に調査せよ。我より求むる心あるを知らしむるな。彼の依據を動搖せしめ、不安を催さしめよ。恐怖にまで之を増大せしめよ。何らかの新なるものに依頼せむとする心を催さしめ、さて新なる道を暗示し、やがて明示せよ。彼はおそらく同志圈内のものとならう。これも最も有效なる一つの宣傳方法である。

第六十 宣傳は我等の宣傳行事のみでなく、凡ゆる機會を選ぶべきである。他の集會に出席せよ。先づ沈黙して空氣を察知せよ。突如根本問題について猛烈なる主張を行へ。來會者が散會の後までその主張の氣魄とその内容とに精神の支配さるゝおもひを味ふ如くせよ。

第六十一 ポスター、リーフレット、立看板、新聞廣告、その他各種の廣告方法については、精細に利害得失を明らかにし、出來得べくんば表を作り運動の便に供すべきである。

第四項 學生運動

第六十二 思想運動の根本は學術改革運動であり、學術運動に關するかぎり、學生運動以外にあり得ない。一般社會人は容易に學術運動に動かぬ一方、學者は運動を回避する。學生が果敢に行ひ得る最も好適の運動である。

第六十三 のみならず現代日本の國家組織の下に於いて、學生の政治的訓練以上に根強き政治力養成方法はない。學生は眼前の利害に動かされぬ汚されざる理想主義者である。國體の信はこの間に最もよく養はれる。のみならず、現代學校教育こそは、現代日本萬惡の源泉である。現代教育との戦は現代日本の最も内奥の強敵との戦である。この戦に於いて鍛へよ。利害關係によつて浮動する現代政治の中に信念を以て行動する者の團結は最大の力である。學生運動は、それ自身一つの政治運動でもあるが、最も大なる政治力の準備であることを忘れてはならぬ。我等はこの來るべき最大の政治力によつて次代を切り開かむとするものである。

第六十四 各學校に於いて血盟の同志を結合せよ。結合を擴大せよ。現代教育との

果敢なる戦闘の過程に於いて生命を伸張せよ。その困難の中にあつて政治的性格を鍛錬せよ。容易に學校との摩擦を惹起する如きは眞の戦士の態度ではない。凡ゆる方法を講究せよ。隱密に、根深く、合法的に、併しながら飽まで本質を晦さず運動を展開せよ。勇猛に、而も奇略縦横に現代教育の缺陷に對して之を根柢より覆す如く徹底的に戦へ。

第六十五 我等の學生運動は、一般政治運動の一翼として發生した學生運動ではなかつた。それは國民運動の發源地としての學生運動であり、思想學術改革運動の源泉としての學生運動であつた。それ故に安易に國民運動に流れて高き思想性を喪失することは、全運動の敗北であることを思ふべきである。

第六十六 合宿と寮とは根軸である。併しながらこの二つは、それが無数の新しき試み、進取的新機軸と連續的に結合されるときにのみ、價值ある樞軸である。事務室、校庭、集會室、散步道、喫茶店、凡ゆる場所が思想訓練の道場となり、官廳、會社、學校、クラブ、凡ゆる既存の組織が宣傳網となり、確實な同志の周圍に、恒

河沙の同感共鳴者が現はれてこそ、運動は軌道に乗つたと言ひ得る。實際的事實に對する執拗な研究のみが、新方法發見の土臺である。如何にして人心の機微を掴んで之を大量に急スピードを以て動かすべきか、について同志は不斷に深く研究するところがなければならぬ。

第六十七 學生を集める爲には、極めて平凡なる教養的要求に對する満足の手段を忘れてはならぬ。研究會、談話會、講習會等は今後に残されたる重要な開拓分野である。

第六十八 全國數萬の學生の眞に横斷的な運動協力體を作らうといふ最初の企圖はいま些か停頓の形である。更めて之が強調されねばならぬ。こゝ一兩年の中に如何なる障害をも乗り越えて遂行されねばならぬ。之は眞の意味の教育、思想、政治改革の爲に最小限度の基礎である。現代學校教育が、無力にたへずして崩壊する迄戦ひ続けねばならぬ。各學校とも組織を作り、連絡を密にし、活動範圍を擴大し、その日間近き國民運動への展開期のために用意せよ。

第六十九 大學を中心とする現代學校教育こそは、日本國民を實人生から、やがて祖國から背離せしめ、無氣力と、懦弱と、虛無思想と權力主義と、外國依存の幕府的心情に導き、現下の百千の國難を招來した原因であることを確實に認識し呼號せねばならぬ。

第七十 同志は常に活動して學校教育の致命的缺陷と、その日本の將來に及ぼす怖るべき効果とについて、具體的に學生、教授、一般社會の間に反覆知らしめねばならぬ。學校教育については自らの體驗に基いて詳細に研究し、鋭犀に指摘し、聞く人をして恐怖を感じしむるやうにせよ。

第七十一 國民生活より遊離し、特權階級化し、斷片的知識の詰込みによつて、思想は分裂し、感情は涸渴し、意志は磨滅し、建康は破壊せらるゝ學校、無數の青年を生ける機械と化する學校、教育精神の全く失はれたる學校、軍隊、家庭、職業との關係なき教育、之等の缺陷は餘りにも累積してをる。最早救ふべき方法はないのだ。

第七十二 現代學校教育は誰人も改革してくれる者はないのである。學生が教育改革をやる以外に、方法はないのである。教育改革なくして日本の將來を發展に導く途はないとするならば、學生の運動は日本の將來を支配する。我等が奮起せざる限り日本國民は窒息する外はない。

第七十三 學校を出てからやると言ふ以上に愚かしき通俗的誤謬はない。結局何事も出来ぬことを數十の歴史が證明してをる。それは勇氣の缺如を意味するばかりではない。學問自體を考へ誤つて居るのである。學問は身を以て行はねば學問ではないのである。

第七十四 教授の學問を權威を以て根柢より批判せよ。之に代る學問を呈示せよ。眞の學問が學校に求められず、我等の研究會に在ることを一般に認識せしめよ。

第七十五 研究會を、寮を、合宿を、講習會を、新しき教育機關たらしむるやう整備せよ。單なる思想運動に非ず、包括的内容をもつて、自然に學校が無用のものとなるやうに努力せよ。

第七十六 閉されたる學生運動ではなく、學生服を脱したる瞬間、一個の國家的闘士がそこにある如く不斷に鍛錬せよ。

第五項 國民運動

第七十七 凡ゆる組織と階層との内部に於いて統一的に連絡する大國民運動を一日も早く展開しよう。マルキシズム、デモクラシーの部類を、坂の御尼毎に追ひ伏せ、河の潮毎に追ひ撥はねばならぬ。久しく且つ數十度、その空言に欺かれた國體明徴を我等の運動によつてはじめて達成しよう。生ける人間にとつて屈辱的現代教育を急速改革しよう。支那事變に結實した凡ゆる作爲不作爲の累積せる欺瞞を排除しよう。史上嘗て存在しなかつた自滅戰爭を至急終熄せしめよう。共產主義的官僚政治によつて導かれた國民生活の困難を除去しよう。指導的階層の不忠驕慢心を破折しよう。大東亞に對する日本の決定的支配を確立しよう。之等は凡べて何人も成さざりしところである。それ故に我等は未曾有の偉大なる時代を建設しようとするのである。

第七十八 舊時代の政黨の手法は素朴であつた。もつと根深く國民生活の凡ゆる部に運動の組織を擴大せねばならぬ。統一的原理の簡明なる揭示は之が遂行上の最大の支持者である。複雑柔輓にして強靱執拗なる運動が之を成功せしめる。

第七十九 學校にあつても、職場にあつても、或程度の同志が結成された上は、一日も早く政治的行動に移らねばならぬ。研究會を當該組織中に重要な役割を擔當するやう法制化すべきこと、不當なる現情の改革、之等のことを要求し、それを貫徹せねばならぬ。又もし抑壓ありたるときは敢然として之に抗し、その正當なる理由を一般に知らしめることが肝要である。慎重に巧妙なる方法が選擇さるべきは勿論である。多衆と事大主義との無内容な權力によつて強き勇敢なる少數正義派が壓迫せられて居ることをはつきりと一般に印象づけねばならぬ。

第八十 運動の進展のためには、既成の團體と協力することを避け、獨力を以て道を開かねばならぬ。もし、協力を要求する必要がある場合は常にイニシアテイヴをとるやう位置すべきである。外面的に同じきが如くして、原理感に於いて相違する

團體に對しては、特に嚴密にこれとの提携を警戒せねばならぬ。常に戰によつて自己の純粹性と擴大力とを保ちつゝ、頑固なる異質者を悉く敵陣に追放集結せしめて之を一擧に屠り去れ。全國民の面前に相對立する兩陣營の本質的相違が鮮明に露呈せらるゝ如く努力せよ。眞に綜合的なるものに對立するもの、それは畢竟假設的泡沫的存在に過ぎない。故に、必然的にそれは崩壊するであらう。しかし、戰の意義を明らかにする爲には、局部的戰鬪による對立者の濟崩しの解消によらず、一度は尖銳苛烈なる對立への誘導が大切である。それは達人の戰略である。戰はとりもなほさず、人の心を震撼するものでなければならぬ。人の心を震盪し得ぬ如き戰は、既にその意義の大半を失ひしものである。

第八十一 既成の團體と協力すべからずと言ふことは、その内部の人と連絡してならぬと言ふことゝは絶對に同一ではない。寧ろ、凡ゆる組織の中に積極的に同志を作り、細胞を作らねばならぬ。凡ゆる方面に共鳴者と協力者とを求めねばならぬ。

第八十二 寮もなく、合宿もなく、まして學校もない。僅かに講習會と研究會とが

許されよう。その他は、事務所と、集會とのみの甚だしく纏りにくい條件の中に、激烈な戦を、宣傳と講演會と、その他二三の方法とによつて展開する國民運動には、逃避すべき場所もなく、躊躇すべき餘裕もない。假定と足場とを撤去して勇往邁進するのみが唯一の心構である。國民生活に没入せよ。

第八十三 一般社會人に對しては時局のニユースが何よりも重要な誘引手段であることを忘れぬこと。それは新しく且つ豊富なることが必要である。之には不完全なものでも、將來に對する何等かの豫言、約束が伴はねばならぬ。それは信頼をかち得る重要な手段である。

第八十四 國民の凡べてを運動の推進力とすることは絶対に出來ない。指導者と被指導者とを至急見分けねばならぬ。被指導者と雖も、限られたる目的のためには一定期間動かすことが出来る。それは我等にとつて一つの力である。

第四章 意志實現の方法と段階

第一項 政治とは何か

第八十五 我等の運動は思想學術運動であり、詰り、藝術の運動であり、靈魂に關する運動、即ち國民宗教運動であると共に、運動である限り畢竟政治運動である。併しながら日本に於いては、政治運動の意味は殊に嚴密に規定せられねばならぬ。何となれば、それは飽までも翼賛と輔弼の問題であるからである。萬一權力を得ることが民政の私心を誘惑することがあつたならば、一切の努力も永遠の呪詛となる。而も、それをおそれて、もし消極に墮するならば、それは今日志ある者にとつて絶對に許されぬ不忠である。

第八十六 ヒットラーは「權力への闘争」と言つた。レニンもまた「經濟主義者との闘争、プロレタリア獨裁への闘争」を叫んだ。兩者の間に多大の意味の相違があるらうとも、共に現情否定一舉改革の革命的手段の宣言である。かゝる一舉改革が必

す大きな反動を生んで、却て徹底的破壊の原因となるのは、人間が感情を有し、感情が相對兩極間の動搖をその性質とすることによつて、理智的判斷の基礎が必ず浮動するといふ心理學的法則による。殊に一つのイデオロギーは部分的感情の片方への偏向に結びつくからして、その反動は急激に來ることを見なければならぬ。共産黨の歴史が理論闘争の歴史であつたことは、最もよくこの傾向を示し、之に對してナチが國民の全感情に訴へたことは、その積極的性質を示してゐる。之等は徹底的研究を要する問題である。のみならず、他國にあつては権力は奪取せらるゝものであるに反して、日本では大權は永遠に 皇位に固有のものであつて、臣民の分は翼賛輔弼の範圍にとゞまる。性格のこの根本的相違は何よりも重大である。政治に關する批判基準は常にこの點に基き嚴重に立てられねばならぬ。

第八十七 かくの如き日本國體の下に於いて、如何なる方法を以てすれば、敏活にしてその効果の包括的なる政治を望むことが出来るか。極めて非本質的なる問題が、國體の根本に對して恢復し難き損傷を與ふる危険があるからして、政治を蔑視し得

る根據は存在しない。また一方政治は權力との結合をその性質とするからして、政治的行動に附隨する權力的強制を如何に制限するかと國體を思ふ者にとつての重大な問題である。信なき者には矛盾と見える。しかし、信ある者は眞の旺盛活潑なる政治は不動の大權の下にこそ望み得ることを知る。吉田松陰「諫死論」を読む者はこの間の消息に通じ得よう。

第八十八 政治は信頼の一語に盡きる。天皇の御信任厚き者、厚かるべき者に對する信頼が、日本の政治の動力である。永遠の策も現實化されぬ限り空想に止る。一切のことは政治的統一の要求を持つ。我等は熾烈なる政治的意識を持たねばならぬ。

第八十九 從來政治は往々輕ぜられて來た時代がある。しかし、國家間の競争が激化し、強國の数が減少し行き、人類生活のテンポが速くなるに従つて、政治は愈々重大になつて來る。それは宗教も藝術も學術も經濟も、凡べては人生の爲のものであるに不拘、人生そのものは畢竟國家によつてのみ守られて居り、その國家は正し

き政治によつてのみ秩序を保ち得るからである。殊に政治が一つのイデオロギーに支配せらるゝ時の危険をおもふべきである。國民生活は一擧に破壊せられ、國家の安穩はたちどころに脅かされる。

第九十 政治は凡ゆる問題を総合的に統一的に解決しようとする要求に基く。性急な外面的統一の要求が、永久の價値を破壊する場合がある。歴史的生命に觸れ、永遠の精神を把持する者にして、眞に政治に參與することが出来る。

第二項 方法及段階

第九十一 學生運動は既に大道を濶歩して居る。基礎は確立した。經驗は備つた。あとは勇敢に進めばよい。一切はそれに盡きる。もとより、學生運動の一切は今後にのみある。

第九十二 學生運動はやがて現在の大學を倒し、根本的教育改革の要求を呈出するであらう。各學校に於いて教授との間に實力を備へた果敢なる論争が開始され、本質的缺陷を持つた學校制度の補足修正より根本的改革の要求が突き付けられ、學生

は教育改革の要求を通して社會に對する強力なる發言權を得るに至らう。國家の中に於いて最も強力なる年齢層が構成されよう。何よりも急速に之が實現を圖らねばならぬ。

第九十三 昭和十六年秋、第一回日本世界觀大學講座から本格的國民運動を展開する。久しい念願である。こゝに於いても、同志が得られ、細胞が植付けられ組織が作られて行かねばならぬ。

第九十四 大正以來のデモクラシー、マルキシズムの遺物たる評論界の清掃が急務である。彼等は今、無氣力にも時局の爲めに自己の主張を賣つて、秘かに思想の闇取引を行つて居る。穴から彼等をおびき出せ。汚れたる正體を暴露せよ。而して之を處置せよ。

第九十五 大新聞大雑誌に巢喰ふ敵に對して微々たる新聞雑誌を以て抗争することきは殆ど効果零に等しい。少數の兵力を以て徒らに退却する傷かざる敵を廣き山野に追ひ廻す對支作戦と同斷である。彼等をして一旦放棄せる陣地は再び永遠に恢復

することなかるべきを認識せしめねばならぬ。それは、一つには青年層は永久に彼等の誤謬と瞞着とに對し假借なき白眼を向くる怖るべき陣營によつて着々組織せられつゝあることを知らしむること、二つには彼等よりも遙かに質的に優越し、且つ量的に豊富なる學問が彼等の學問を根柢より覆すべく用意せられ、三つには彼等を支持する階層の間に彼等に對する不信を懷かしむることである。絶望は彼等を怒らしめよう。反撃し來つて初めて補控殲滅も可能である。

第九十六 我正しきが故に、敵は敗北しくれるであらうと考へるのは何某公府と等しい。敵を支持する階層を離反せしむるは兵站線の中斷と同じである。今日はことに、軍部の信用を失はしむることが捷徑である。

第九十七 今日の権力は間斷なく浮動する。それとの偶然の結合により、権力を以て言論界を改革せむとするときは必ず失敗に終らう。組織と宣傳との徹底的戰。この外にはない。必勝の道である。

第九十八 個々の問題に關する限り、各個撃破で鮮かに敵を片附けて行かねばなら

ぬ。即ち攻撃の對象を一點に集中し、その周圍を味方の堅固なる中核體に引つけ、攻撃の對象を孤立せしめて容易に之を倒す。併しながら、一貫する世界觀戰は之に反する。國民の内心に匿されたる炎に點火する激烈簡單なる標語を掲げつゝ、斷絶せざる假借なき戰を通して、各陣營の内部崩壊を導きつゝ、截然相對立する陣營に二分せねばならぬ。即ち一は明確なる世界觀により猛然と機敏に動く友軍の中核體とその支持者、他は曖昧なる無數の分裂。而して我等はこの敵方に容易にマルキシズム影響圈の名を冠することが出来よう。かくして、遂に、一舉に敵を屠ることが出来る。

第九十九 而して無敵とは超越的激烈と同義語である。

第百 選舉だけの政治だと考へた愚昧が政黨を没落せしめた。利害の問題は人生にとつてさう頻繁ではなく、況して重要ではない、もし、之を一つの世界觀を持ち、内心よりの要求に驅り立てられてをる者の心を刺戟する現情に對する不滿の限りなさに比較すれば、狂信的熾烈さを以て凡ゆる問題を捉へて間斷なく運動は展開され

ねばならぬ。忽ち燎原の火と全國に燃え擴がらう。日本國民の心に、彼等の信頼すべきものが明瞭に認識せられよう。彼等自身の精神の模型をそこに見出すであらう。彼等の信念と性格とが形成せられて行かう。それより後については、こゝに記す迄もない。

第一百　かくして、こゝ十年間に於ける大東亞完全支配の旗印が明確に掲げられねばならぬ。戰敗國との平等無賠償、不割讓、何たる弱者の愚憫であるか。かくの如き舊時代の一切の汚れたる懦弱が拂拭され、神武天皇御東征の雄大なる原始的精神が復活せねばならぬ。

第二百　此の方向のみが唯一の道であることが明確に主張され、且つ事實を以て證明されねばならぬ。他にもあらむと言ふ如きは、信念の薄弱を證明する以外の何もでもない。

第三百　明治天皇の宸襟を太く懷まし奉りし社會主義的自由主義者西園寺公望が大正初期元老となるに及んで、殆ど大正昭和を通じて唯一の元老として猷替の任にあ

り、大正時代國民をして骨の髄までデモクラシーの信者たらしめ、昭和に入つて日本總赤化の形勢を馴致しつゝ、思想問題は些かも改善せられぬまゝに、西園寺の後繼者近衛文麿首相の印綬を帯び、支那事變の勃發となつた経過は、同志の夢寐にも忘れざるべき重大史實であり、我等の運動の起らざるを得ざりし據所である。

第四百四 昭和初年、所謂元老重臣は自覺無自覺の自由主義外國依存主義者であつた。彼等はデモクラシー天皇機關説の信者である點に於いて國體に反する。併し多くは意識的に反國體であつたのではなく、ましてマルキストではなかつた。又彼等は無能ではあつたが常識的であり、國力を相應に評價し、實際的であつた。今日之に反對する革新論者は、殆ど意識的無意識的反國體マルキストであり、能力と勇氣とはあるが、空想家、氣違であり、國家を自滅に陥れることを平氣でやる。我等は、前者を後者の道案内であるとおもふが、まだしも動機のよい者の中には健全なるものを發見する。後者は破墳以外を知らぬ。

第四百五 新人會が今日の國民の思想的支配者である。支那事變は、マルキシズムの

未解決といふ重大問題と離して考へらるべきたゞ一つのこともない。軍人と官僚との間に久しく醸成された形式主義は、幸にも今日マルキシズムの影響下にその極弊を露出しようとしてゐる。當面の敵はこの兩者と、その師たる帝大教授、評論家、學者である。詳細をこゝに記す餘裕はない。

第百六 権力を帶べる者との果敢なる戦こそ純なる國民の信頼を贏ち得る要因である。戦とは闘争はでない。調伏である。

第百七 支那事變の見透しは依然としてつかぬ。大消耗戦の結果は國民の眼前にはつきりと表はれつゝある。政治に對する信頼は殆ど地を拂はむとして居る。米國に依存しようとして、英米の日本没落方略に陥らむとする。國民鍛練の道は何一つ講ぜられて居らぬ。次代に對する施策も皆無である。日本は自滅を待つ外はないのであるか。神州は汚辱されたまゝでよいのか。志ある青年の痛憤が爆發せぬ限り、日本は遂に生くる力を根柢より喪失するのみである。蹶起せよ、蹶起せしめよ、青年よ、友よ。

第八 國民が國家の前途に對する希望を喪失したこと、生活の安定を失ひ生計の脅威にさらされて居ること、この二つは殊に重大な政治的轉換の要因である。國民が何を願ひ、求めて居るかを、はつきり看取せねばならぬ。青年の蹶起のみである。

跋

政策の細目が建てられねばならぬ。戰闘綱要が詳細懇切に規定され、且つ之に則つて運動が急速に進められねばならぬ。この思想戰闘綱要第一版は同信諸兄の検討を経てやがて完璧のものとならう。間もなく補遺が印刷されるであらうし、その後、根本的改訂を経て第二版が印刷されねばならぬ。その時は諸兄の意見が徴せらるゝであらう。それは戰の一段階を作らう。何よりも戰線の統一が必要であり、急激な進展が規格に則つて實現さるゝ便宜が得らるべきであり、豊富な經驗が次の問題の惹起に役立たねばならぬ。諸兄！ 前進だ。いま、戰線はたしかに豫定の進出を見せなくなつた、膠着状態では斷じてないが。

昭和十六年十月十五日
昭和十六年十月十七日

印刷
發行

以印刷代謄寫

(非賣品)

編輯
行人

加納祐五

印刷
人

近藤喜七

印刷
所

順弘社印刷所

東京市芝區西久保也町三〇番地
電話 芝二八九〇番

發行所

精神科學研究所

東京市麹町區麴町三丁目六番地ノ二
電話 九段(33) 四四六九番

